

楽しみは下り坂にあり

以前、「八十歳からはスキー」という思い付きをアピールした。ぼくが五十台前半、NHK教育テレビ番組「中高年のための登山学」で日本百名山を追いかけていた頃、「もう古希過ぎたので、山登りを止めようかと思う」という会員さんがいたので、「まだまだこれから」とお尻をたたくと、「そうですね」と納得されて山を続けて下さった。体力の維持・増強には山が最良の運動なのだ。それから五年、「もう後期高齢者になったので、山登り止めようかと思う」と言い出したので、「まだまだ登れますよ」とお尻をたたくと、「そうね」と言いながら、楽しげに山を続けて下さった。それから五年、「八十歳になったから、山登り止めようかと思う。足が上がらなくなっちゃったのよ」とおっしゃる。

八十歳を過ぎても軽々足が上がっていく人がいる。そういう方は例外で、足が上がらなくなったと言う方が普通であろう。さすがの岩崎も、足が上がらなくなったという方のお尻をたたくことはできない。しかし、山を止めてほしくない。自然の気が、元気の「気」であることは自明だ。無理なく、自然と関わる法として思い付いたのが、「八十歳からはスキー」である。

六十台も半ばを過ぎ、畳のへりにも引っかかかってころびそうになり、バランスが悪くなったことを思い知らされた。登山インストラクターを続けて行く以上、バランス低下に歯止めをかけなくてはならない。思い立ったが吉日で、スキーとクライミングの再開を決意した。早速出かけて行ったスキー場の食堂で、テーブルの上に乗っていたスキー雑誌に手をのばした。パラパラとめくっていたら「登山は重力に逆らうスポーツ、スキーは重力に体を預けるスポーツ」、という言葉が目飛び込んできた。この言葉との出会いが、「八十歳からはスキー」を思い付かせてくれた。八十歳を過ぎたらもう登らなくていい、下りを楽しもう。重力に逆らえなくなったら、さっさと宗旨替えるのがハッピーな人生のはず。登りは卒業、これからは下りを楽しもうと思っていたところに、素敵なお本が降って湧いた。

先日、年に一回ぼくにネクタイを締めさせるパーティに出席したときのこと、素敵なお土産を貰って帰った。「『下り坂』繁盛記」という本である。著者は嵐山光三郎さん。帰りの電車の中でパラパラとめくると、「下り坂は商売になる」という言葉が目飛び込んだ。へえ、と思いながらさらにページをめくっていったら、「楽しみは下り坂にあり」と気がついた、とある。「下り」にお墨付きを貰ったようなものである。

ファミリーゲレンデのリフトに乗る。爽やかな風が頬をなでる。生きていることを実感させてくれる幸せな時間。リフトを降りてファミリーゲレンデをゆるゆると滑る。スキーは足が上がらなくなっても楽しめる遊びだ。八十歳からのスキーを存分楽しめるように、今シーズンからスキーを始めてみませんか。